



“農林業”の基盤が揺れた日

撮影：稲葉一成

松涛

No.21

2005. 3. 1

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	4
同窓会役員名簿	4
農学部を去るにあたって	5
同窓生からのたより	6
支部だより	8
農学部フォーラム	10
街にでた農学部	11
学部だより	14
新たな枠組みの運営	15
編集後記	16

法人化後半年が経過して

農学部長 鈴木敦士



皆様ご存知の様に本年四月から、国立大学法人新潟大学が誕生しました。

法人化についてはすでに松涛二十号にその概要をお知らせしましたが、いざ法人化がスタートしますと、いろいろな問題点が浮上してきまして、国立大学当時と変わった点について、皆様に御興味のありそうなところを少し紹介したいと思います。

教育研究院制度

教育研究院とは松涛前号でお知らせしたように、各教員の所属を従来の部局の枠を外し、医歯学系、自然科学系、

人文社会・教育科学系の三つの教育研究院所属に再編成し、教育・研究の任にあたるという制度です。

農学部在籍教員の辞令は四月一日から、「自然科学系に所属し農学部の担当を命じる」という形になりました。

これに伴って、学部教授会は存続しているものの、自然科学系教授会（自然構造科学系列、材料生産システム系列、生命・食料科学系列、環境共生科学系列、情報理工学系列の各系列所属教員の代表者による）が自然科学系教員の最高の意思決定機関になりました。農学部の農業生産科学科及び応用生物化学科教員は理学部生物学科教員と共に生命・食料科学系列を形成し、生産環境科学科教員は工学部の建築・建設学科、理学部の自然環境科学科及び積雪地域

災害研究センター教員と共に環境共生科学系列を形成しています。学部学生の教育に関する事項は学部教授会の審議に委ねられますが、研究・人事に関する事項は学部の手を離れて、学系教授会の審議事項になりました。予算も全て学系教授会を通して配分される様になっています。

今後、学部の壁を取り払い、自然科学部を指向する動きが出て来るかもしれません。農学部と言う名称を維持するためには、農学部の独自性・必要性を如何にアピールしていくかが重要になると思います。

社会（地域）貢献

言うまでもありませんが大学の役割には、(1)次代を背負う人材の育成という教育、(2)真理の探求と明日の世界・日本を担う新技術の開発研究、(3)大学で獲得した研究成果や情報を広く社会に公開し、産業の育成と教育・PRにより科学技術を身近に感じてもらうという社会貢献、の三つが

あります。特にこれからは、社会に大学の存在価値を理解してもらうような活動がより重要になると思います。

新潟大学全学同窓会 連絡協議会

くなるものと思います。

七月十三日に三条、中之島地区を襲った水害に対するその後のボランティア活動、被害調査や原因解明のための研究、農学部と交流協定を結んでいる小国町の災害復旧支援活動はフィールドサイエンスを教育研究の柱の一つとする農学部の活動として広くPRしたいと思います。また、十月二十三日に突如発生した中越地震は、その被害の大きさと現在まだ余震が続いている中で、農学部として何が出来るか模索中です。中越地区出身の学生も多く、また卒業生の就職先も数多く存在することから、出来るだけの事をしたいと考えています。

新潟市は近く、周辺の市町村と合併し、政令指定都市を目指しています。市長は「田園型政令指定都市を目指す。キーワードは、環境・食・花である」と言っていますので、農学部の役割はますます大き

各学部の同窓会を一本化した新潟大学全学同窓会連絡協議会が法人化にあわせて四月に発足しました。七月二日には大学との懇談会が開かれ、「新潟大学の更なる発展に向けて」と題して、(1)ブランドイメージを上げるための方策、(2)同窓会からの大学への期待、(3)大学からの同窓会への要望、などが話し合われました。(十月末に予定されていた、法人化記念シンポジウム及び全学同窓会交流会は地震被害の大きさに配慮して延期されたことを記しておきます)。

法人化後半年経過した農学部の様子についてを御紹介しましたが、「手探りの状態です。進んでいる」というのが率直な思いです。同窓会の皆様のご理解とご助言・ご支援を賜りたくお願い申し上げます。

異常気象と危機管理体制の確立

同窓会長 小林 一三



年間の自然災害は、過去の記録を超える異常気象のせいでありました。

会員の皆さん、2005年の新春を迎え、益々のご健勝とご活躍のこととお察し申し上げます。

昨年は、大型台風の来襲、集中豪雨、そして新潟県中越地震と、まさに異常な自然災害に見舞われた一年でありました。ここに被災された方々に、改めてお見舞い申し上げます。地域での生活、事業活動に頑張っておられる同窓生の方々は、健康には十分留意のうえ、家族、企業そして地域社会のために力添えをお願いするとともに、一日も早い復興の目途が立ちますことを祈るものであります。さて、世界的に見た昨年一

東京の10月の降雨量は、一年間平均降雨量の半分に当る700mmに達したり、イタリヤのサンマルコ広場が1.5mも水浸しになったり、またアメリカフロリダのハリケーンの凄まじさ。インドとバングラデッシュの大洪水。アフリカの旱魃とバッタの大襲撃。ポルトガルの山火事。パリの猛暑。イギリスボスカッスルの洪水などは一時間100mmの降雨を記録。ヒマラヤではモンスーン後の乾期のさなかに、常識的では考えられない雪が降ったりと、まさに世界各地で異常な年でありました。

新潟県内にあつては、長岡地域と三条地域で7月12日の夜から13日夕方にかけて激しい雨が降り、その総降水量は栃尾市で421mmと過去最大の記

録となり、一時間の降水量63mmは統計開始以来の極値となつています。結果、現河川の流下能力をはるかに上回る出水となり、山地は荒れ、農地は冠水、市街地は甚大な被害を被り、特に悲劇となつたのは災害弱者といわれる高齢者の被災でありました。

刈谷田川、五十嵐川兩岸とも、40年前即ち昭和39年新潟地震と同じ年に大水害が起き、この復旧とその後の治水対策に関わつた私自身にとって感慨ひとしおであります。

ここにあつて近年の降雨の形態は予測以上に局地、集中化が進み、統計処理する時間もないため、次年度に再現する可能性が大きく、しかも山地の荒廃は下流域の被害を倍加する恐れがあります。

治山、治水のあり方について、ハードは勿論、ソフト対策についても抜本的に検討を試みる必要にせまられております。日頃から自分の住む流域のこと、地域のことを知らしめることの必要性を痛感します。

また、10月23日震度7を記録した新潟県中越地震は今後大きな困難な課題を残すことになりました。

恒久的な復旧計画はこれから、だと思ひますが、まずはライフラインの確保と多くの避難生活を余儀なくされている方々の住まいの確保が必要であります。

中越地震と同じ震度7に見舞われた阪神淡路大震災は、激震が人口密集地を襲い6千人を超す死者を出した「都市型地震」であつた。それに対して中越地震は被災地の多くが信濃川という大きな河川周辺の中山間地にある「農山村型地震」でありました。しかも全国有数の「米」どころであり、自然景観にめぐまれ豊かな地域でありましたが、近年の過疎化、高齢化に加え豪雪地帯でもあり、しかも地すべり、がけ崩れ、土砂災害の多発地域であつたことから多くの課題を残すことになりました。

震災復興には「神戸」に学ぶべきことは多いと思ひます

が、「中越」の復興には、農山村のより豊かな美しい地域づくりの視点が必要であります。

7・13水害も、中越地震も、神戸にも勝る多種多様なボランティアの姿がみられました。とくに専門的な技術をもつた方々や若者達には大きな希望を与えてくれていました。

地球温暖化と異常気象にあつて、21世紀は環境問題と併せて自然災害に対処する安全な国土づくりと、危機管理体制の確立、そしてだれでもが参加する「ボランティア」立県の構築を急ぐ必要があると考えます。

会員各位の一層のご活躍を祈念し、会長あいさついたします。



今年度の活動計画

幹事長 山 本 仁 志

同窓会基金は、皆様のご協力により、一昨年度水準までほぼ回復しました。

しかし、会計状況は昨年度とほぼ同様の推移をしていますが、新入生入会率が91%と3ポイント上がりました。

本年度は、新潟大学同窓会連絡協議会が平成16年4月1日に発足しました。このため、事業会計予算項目に新潟大学同窓会連絡協議会負担金を新規に加えました。負担金額は会費的なもの3万円に連絡協議会事業負担金34万円（平成15年度全入学生数の農学部比率6・8%）で合計37万円を計上しました。

基金からの繰り入れを出来るだけ少なくし、昨年度の会計規模としています。

1、「松濤」21号の発行

これは、同窓会活動年次報告も含み、同窓会皆様への絆です。

2、国際交流事業への支援

「留学生懇談会」への補助も昨年同様引き続き行います。

3、学内諸行事への支援

「農学部運動会」、「農学部クリーンデー」など、その他の学部内行事に補助を本年度も引き続き行います。

4、学術・文化活動への支援

農学部学生が自主的中心に学術・文化活動を行うグループ等への支援、その他農学部が行う学術・文化行事への補助も引き続き行います。

新潟大学農学部同窓会役員名簿

(平成16年～平成19年)

役員および監事				幹 事				在 校 幹 事			
役 職	卒業回	氏 名	職域	卒業回	氏 名	卒業回	氏 名	卒業回	氏 名	氏 名	氏 名
名誉会長 (農学部長)		鈴木 敦 士		17	齊藤 宏 三	10	早川 嘉 一				
顧問	1	五十嵐 孝 哉	新 潟 県 庁	18	上田 茂 樹	12	伊東 睦 泰				
"	1	丹羽 国 夫		18	小林 好 雄	14	伊中 野 俊				
"	1	樋口 広 衛		19	小矢 代 久	15	樋浦 善 忠				
"	1	保坂 亮 雄		20	渡邊 利 和	15	伊藤 藤 山				
"	1	桜川 種 雄		26	伊東 泉 達	16	阿部 沢 信				
"	2	波多野 松 重		29	小大 嶋 夫	16	阿三 星 野				
"	2	高橋 康 夫		31	大工 藤 明	17	三 星 野 智				
"	2	五十嵐 太 郎		34	神田 尚 樹	21	紙 谷 市				
"	2	渡部 豊 悦		35	前川 敏 宏	23	古 柳 剛				
"	3	水科 文 昭		35	柴田 内 徹	24	青 渡 岡				
"	3	中浅 山 治	教 員	40	山内 博 久	25	青 渡 岡				
"	3	妻林 正 武		42	服吉 白 井	26	岡 崎 口				
"	5	小内 山 武		44	白 井 尚 晃	29	栗生 田 雄				
"	8			46	佐藤 尚 晃	30	栗生 田 雄				
会 長	6	小林 一 敏		15	佐藤 尚 晃	35	稲 村 一 稔				
副 会 長	専4	細 貝 池 治		34	田 村 義 雄	35	稲 村 一 稔				
"	4	小吉 田 久 郎	農 業 団 体	18	中 井 義 雄	37	稲 村 一 稔				
"	4	小吉 田 久 郎		19	若 井 義 雄	38	稲 村 一 稔				
"	6	早川 利 誠		34	横 谷 昌 行	院H12	院H12				
"	9	小島 護 隆		46	谷 川 助 三						
"	13	中藤 藤 達	農 専	専1	阿部 光 昭	支部代表幹事					
"	14	進藤 村 雄		専2	梁 取 昭	支部名	卒業回	氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
"	15	石藤 柳 一		専3	梁 取 昭	首都圏	23	村 上 哲 昭			
"	17	伊藤 柳 一		専4	梁 取 昭	富 山	8	嶋 川 幸 夫			
会 計 監 事	24	青渡 山 仁	一 般	5	原 若 元	秋 田	9	川 村 久 昭			
"	25	青渡 山 仁		13	若 元 青	福 井	14	青 村 久 昭			
幹 事 長	12	山本 征 博		14	青 平 田	福 島	5	高 佐 藤			
副 幹 事 長	14	荒佐 山 博		15	青 平 田	長 野	6	高 佐 藤			
"	15	山本 征 博		18	青 平 田	北 海 道	6	高 佐 藤			
"	19	山本 征 博		19	青 平 田						
"	26	山本 征 博		21	青 平 田						
"	29	山本 征 博		21	青 平 田						
会 計 幹 事	院7	山本 征 博		23	青 平 田						
"	33	山本 征 博		24	青 平 田						
事 務 局	40	山本 征 博		24	青 平 田						
	3	山本 征 博		25	青 平 田						
		山本 征 博		34	青 平 田						

農学部を去るにあたって

母校での47年の想い

早川 嘉一（生産環境科学科）



戦後の復興
も一段落した
昭和33年4月、
漠然とした気
持ちであるが

将来を夢見て新潟大学農学部
農学科に入学した。4畳半一
間のアパート、インスタント
ラーメン（今のチキンラーメン）

で空腹を満たすような質
素な時代であったが、先生方
の情熱のこもった講義に感動
し、先生方の取り組みを見てお
られる研究を垣間見て自然の
営みの不思議さに胸を踊らせ
毎日が新鮮で充実した学生生
活であった。

この4年間の学びと体験が
支えとなり43年間の職務を全
うできた。ご指導を下さった
恩師の先生方に改めて感謝致
したい。卒業研究を総合農学
科の大竹次郎先生（土地改良
学研究室）のご指導を仰ぎ、

4年生の秋に林学科砂防工学
研究室の尾張安治先生から助
手のお誘いを頂いた。新潟県
庁に採用内定していたことと
自分にとって教育・研究がや
れるのか不安で躊躇したが、
尾張先生の心強いアドバイス
で昭和37年4月から母校の教
員として歩みだした。

最初の仕事は、尾張先生の
学位論文「砂防堰堤の下流洗
掘に関する研究」の水理実験
を担当し、大型模型水理実験
の実験システムの構築に取り
組み、模型水理実験による解
析理論の検証を行った。昭和
41年、尾張先生の学位取得を
皆で喜び合ったことがつい先
日のように思い出される。自
前で作った全国一の大規模水
理実験施設は研究室の誇りで
あった。砂防専攻生の皆の協
力に感謝したい。模型水理実
験で検証し設計した水理構造

物は、県内では青田川流路工、
魚野川流路工、牛首川流路工、
焼山川砂防ダム、新信濃川第
二床固下流洗掘防止工、新信
濃川第二床固副堰堤稚鮎採補
施設、阿賀野川頭首工魚道、
飯田農業用水落差工、富山県
の瀬戸蔵堰堤、水谷沢流路工、
祖母谷堰堤、石川県の御鍋堰
堤、百合谷堰堤、福島県の銀
山川流路工、山梨県の釜無川
流路工、流川流路工がある。
これらの全ての施設が40年の
歳月にめげず安全に機能を果
たしていることに安堵してい
る。

昭和39年の新潟地震では震
源域の岩船・山北山系の崩壊
調査で砂防研究室16名総出で
の全山踏査が思い出される。

昭和42年の羽越水害の土石
流・崩壊調査では土木構築研
究室1回生13名総出で災害発
生直後から2ヶ月間現地に泊
まり込み阿賀野川から荒川に
至る五頭山・櫛形山系の全水
系を踏査した。翌年、この
研究成果「土石流の科学的解
明と防災対策への貢献」で新
潟日報文化賞を受けた。研究
室皆の力の結晶である。授賞
式前日の恩師尾張先生の突然

のご急逝が無念であった。

その後、県内各地域の地す
べり災害、妙高土石流災害（昭
和53年）、浦川土石流災害（昭
和60年）、阪神淡路大震災（平
成6年）、県北地震災害（平
成7年）、昨年の中越水害・
地震災害と災害と歩んだ43年
であった。専攻生と共に貴重
な体験をし、厳しい中にも楽

明日はあるか？農学部を去るにあたって

集 治 善 博（フィールド科学研究センター）



この
たび、
農学部
を退職
させて
いただきます。松涛に何か書
けということですので、ご挨拶
代わりに小文を残します。
平成5年岩手県畜産試験場
から農学部村松農場に参りま
した。その年は冷夏・冷害の
年で、本年（平成16年）もま
た、7月の水害・10月の中越
大震災等と大変な一年でし
た。何かの因縁かもしれませ
んね。

村松ステーション（農場）

しく調査・研究ができたこと
に感謝している。

これからは、この貴重な経
験を少しでも社会に役立てた
く考えている。最後に、これ
まで育んで頂いた農学部、そ
して同窓会にお礼申し上げ、
さらなる発展を祈念して筆を
置きたい。

退職に至った経緯を説明し
ます。一言でいえば、ここ5
年ほどの間に人生観が変わっ
たということです。言い換え
れば、「お勤めはもう結構、
自分なりにやりたい」となり
ます。在職中には、国立大学、
新潟大学、農学部、農場（F
C）、村松ステーションにおい
て、様々な「改革」「変革」
がありましたが、必ずしも職

同窓生からのたより

食と環境の現場から

7・13水害の現場から

三条市役所 農林課

吉野 賢一（昭48農）



場や業務内容が良くなったとは思えず、むしろ仕事がいかになくなったと感じます。そして、ついそう考える自分に気がつきました。そんなこんなで、退職して自分流の生活をする決心をしました。また、脱サラ・田舎暮らしブーム、新しい農業のあり方、など時代が背中を押してくれたとも感じます。

今後の予定を少し紹介します。何もない山の中で、動物や植物といっしょに細々と生きていこうと考えます。「自給的生活・農的生活」が新しい目標です。自給といっても何もかも自分で作るのには無理、しかし、一農学徒としては従来の農業や農学と一線を画したやり方、すなわち自分流の「自給的・農的生活」を作っていくのです。

というわけで、自分の勝手に退職することになりみなさまにもご迷惑をおかけしますが、農学部関係者のみなさまのご健康とご活躍を祈ります。

早いもので農学部卒業後30

年余りを過ぎ、豊栄市で9年間と三条市の農業の現場で仕事をさせていただいております。卒業の時、学長（長崎明学長）の言葉にありました「一隅を照らすべし」は強い印象として残っております。

私の勤務する三条市は県央の中核都市で人口8万6千人、隣接する栄町、下田村との平成17年5月1日合併を目指し、工業出荷額2千億円強、商店販売額4千8百億円強、農業算出額50億円弱で金属産

業を中心とした地場産業の盛んな市であります。

農業では、信濃川、五十嵐川、中之口川の豊かな沖積土による水稲、果樹（もも、ぶどう、なし）野菜（キャベツ、ホウレンソウ等）の産地です。

さて、今年の気象変動は今まで経験したことのない年であり、残りは大雪くらいかと心配しております。とりわけ、7・13梅雨前線豪雨は突然、想像をしのがなかった（ダム神話）五十嵐川堤防の決壊という大惨事を引き起こしたことであります。

当日は早朝からの激しい雨で（下田村笠堀ダム時間雨量57mm）市内各所の調整池は満水、道路への浸水が始まっている状況の中、出勤した次第です。早々に土砂崩壊による林道の通行止めや浸水による市道通行止等の報告に基づき、2班による現場調査を実

施しました。（この後、午前9時市災害対策本部設置）まず、基幹排水機場の稼動状況確認や、水田の浸冠水、林地の崩壊状況の調査を実施しまし

た。引き続き林道被災箇所の調査中に、雨音に混じって五十嵐川上流の笠堀ダム放流の警報サイレンが聞こえてきました（放流水は約2時間後に三条市へ到着）。即、調査中止、

帰庁することとし、五十嵐川右岸堤防を帰路に取り、濁流、堤防の溢水、消防団による土嚢積みが行われ始め、異常事態が想像されたところでした。帰庁後状況報告、午後再調査、午後1時15分左岸諏訪地内堤防決壊となり、濁流が嵐南地区を飲み込み市民生活や地場産業に甚大な被害をもたらしたところでした。

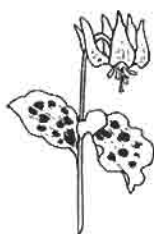
雨音等により避難広報が市民に十分伝わらなかったことから、多数の市民が避難対応できず、救助活動はボートやヘリコプターでの対応となり、食料は腰や胸まで水につかりながらと困難を極めました。また、水が引いた後の泥

やゴミ、炊き出しや救援物資の手配に多くのボランティアや県内外自治体からの支援をいただき、8月末にようやく災害対策本部解散となったところでした。まだまだ被害の影響はたくさん残っておりますが、復興への取り組みも始まり、はがねの強さをもつ三条魂で立ち上がってまいりたいと思います。

今回の災害で強く感じたことは、いかに安全、安心のまちづくりが必要か。そして地域コミュニティの大切さを身をもって確認しました。

本稿構想中に新潟県中越地震が突如発生、幸い本市の被害は軽い状況であります。被災地の皆様のことを思うと、いてもたってもおられません。明日は長岡へボランティアに行きます。

（11月6日起稿）



食の教育について

新潟県立長岡農業高等学校

右田 久人(平6林)

本校では主に農業科学基礎・応用微生物・食品製造を担当しています。教員歴は十年ほどですが農業科学基礎、微生物と食品製造の関係について私なりの考えを述べたいと思います。

食品製造の授業では製造原理・方法を中心に展開してき

ましたが昨今の教育事情を考えるとそればかりやるわけにはいかなくなりました。そこで私は偶々農業科学基礎と応用微生物を担当していましたので食品製造と併せて食に関わる授業の展開を考えています。

これまでの食品製造実習では原材料を市場から仕入れて行ってきました。昨年度より農業科学基礎で大豆と大根を作り食品製造で味噌、漬物に加工しています。このように生産から製造まで一貫して行うことによりこれまでに比べ



生徒の実習における興味・関心が格段に上がっています。まだまだ上手くないこととありますが頑張っています。

食品製造の中で微生物の働きは重要です。その変幻自在なその働きに興味を持たせるために発酵食品と食品衛生に関連付けて授業を展開しています。概略を述べると二年・三年生で天然酵母、乳酸菌、酢酸菌、枯草菌を分離・培養しその性質及び働きを調べ、それぞれを応用した発酵食品の試験製造を行っています。前記の農業科学基礎とも絡めて行うと都合三年間継続教育できる形にしています。最近の食に対する関心度は

格段に上がってきています。この時期だからこそ食に対して興味を持ち、正しい知識を学ぶことが大切ではないかと考えます。私も大それた事を行っていないわけではないのですが、少なくとも生徒には食に対して興味を持ってくれるような授業の展開を行ってまいりたいと思います。

砂防の現場から

岩手大学農学部

井良沢 道也(昭54林)



このたびの新潟中越地震で被災されている皆様方に心よりお見舞い申し上げます。

昨年は宮城県など東北地方で2度の地震が相つぎ、本年10月20日に砂防学会シンポジウムが仙台市において「大規模地震と土砂災害」というテーマで開催された矢先のことで大変驚きました。同窓生

の皆さんにおかれても被災された方、また今回の災害対応で日夜奮闘されている方など多くおられると思いますが、新潟県出身の私としても一刻も早い復興を願っています。

さて、私は昭和54年に国家公務員試験砂防職に合格し建設省(当時)に入りました。大学へ入ってから砂防という学問が林学科にあることを知り、新潟県をはじめ災害の多い地域で本学卒業生が活躍していること、また砂防職試験に毎年先輩が合格していることからこの世界に飛び込みました。入省後は主として全国各地での砂防の現場や土木研究所勤務となりましたが、平成13年10月より今までの経験を活かして宮沢賢治を輩出した岩手大学農学部で砂防の教育研究に携わっています。

教壇にたつて若い学生に教えている最中に、ふと20数年前に学んでいた自分の学生時代にタイムスリップする瞬間があります。在学中に印象深かったのは、農学部が広範な自然科学技術を相手にしてい

ること、地域に密着していたこと、実習など通じて自然から学ぶことが大きかったことです。特に表面だけでわからない自然現象の背後にある様々な現象をつきとめることの大切さ(私のテーマである土砂災害の予知予測には重要)を教えてもらったと思っています。また何より、在学中から今日まで多くの先輩・後輩から励ましがあつたからやつてこれたと感謝しています。現在でも(株)オリスなど新大出身者との共同研究があり、ありがたく感じています。

旧国立大学は、本年4月1日、国立大学法人法によって新しい大学に生まれ変わりました。人口急増による食糧問題や地球温暖化に象徴される環境問題など課題の解決には、これまで農学分野が蓄積してきた総合科学技術が重要な役割を担います。母校新大農学部がさらに輝かしい「知の拠点」となりますことを祈念します。

支部 だより

首都圏支部

首都圏支部は平成16年度(第18回)首都圏同窓会農学部会を6月4日(金)(於・東京駅大丸ビルホール)にて開催しました。鈴木農学部長のご出席を頂き最近の新潟大学の現状また農学部近況をお話し頂きました。新しい試みとして講演会を企画しました。

今回は山田文雄氏(林50年卒森林総合研究所)にお願いし『生物多様性が危ない』の演題で研究発表されました。日本固有の生物を守らなければそのうち絶滅する動物が多い事を知らされ今一度環境保全の重要性を再認識しました。講演会は好評でしたので今後も続けたいと思います。



我こそはとお考えの方は是非当方迄お申し出下さい。

は懇親会となり大いに盛り上がり最後は四季の新潟の合唱で終了となりました。尚出席者は30名でした。首都圏の同窓生の皆様ご出席をお願いします。来年(平成17年)は首都圏全学同窓会の幹事学部が農学部となります。同窓会本部をはじめ同窓生皆様のご支援を宜しくお願いし首都圏支部の活動報告とします。

村上 哲昭(昭50林)

北海道支部

本年度8回目を迎える北海道同窓会は、10月16日(土)に、札幌市ススキノのジャスマックプラザホテルで開催しました。

札幌市とその周辺の多数の同窓生の出席を期待したにもかかわらず、当日は「大安吉日」のせいか、出席者は女性1名を含めて11名でした。

総会は午後5時30分から始まり、井田副会長の開会の言葉、紺谷会長の挨拶に続き、平成16年度事業報告と五十嵐の同窓会常任幹事会出席報告後、平成17年度事業計画を協議しました。

役員改選では、現役員は平成16・17年度の全員が留任す



るとともに、昭和60年に以降に卒業した中で、3人を新たに幹事としました。総会に続く宴会では、ひとり酒が回った後各自の近況報告があり、これをネタに、又ひとりしきり盛り上がりまし

た。今回は初めて宿泊のない同窓会でしたが、体力にゆとりのある有志は2次会に足を運んだようです。

次回は平成17年の秋頃、十勝管内広尾町で、宿泊しながら語らいと海の幸を堪能することとします。

五十嵐龍夫(昭24農科)

秋田支部

新潟中越地震被災者の皆様に秋田より心からお見舞い申し上げます。当秋田支部では現在、会員に対して義援金募金活動を実施しております。今月末には集約して、わずかなではありますが関係機関を通

じ送金させていた

だきま

す。

被災状況の報道を見聞きし、全国の多くの同窓生が支援に駆けつけた

いていること

でしよう。本市の各部局からも派遣されており、職員から生々しい現状を聞き、心から一刻も早い復興を願っているものです。

さて、災害といえば、今年ほど台風の襲来を受けた年もありません。本県では、特に15号など3個が同じようなコースで接近し、沿岸部を中心に大きな農業被害が発生しております。中でも塩害は、これまでない規模で水稲、大豆、果樹などに打撃を与えており、農家にとっては米価の下落とともに複合的なダメージとなっておりま

す。今年夏以降、被害調査と被災農家支援策に奮闘し続けた半年となりました。

小島 武志(昭25農工)



福島支部

去る7月31日、本年度の同窓会常任幹事会がウエルシテイ新潟で開催され、故楠智宏支部長のあとを受けて初めて出席しました。

小林一三会長の挨拶の中に大学法人化に伴い大学が変革の時期にあること、新潟大学同窓会連合会設立の動きがあり、今、本学が激動の中にあることを実感しました。

私自身、河渡キャンパスで、研究室の萩屋薫先生や黒井伊作先生をお囲みし、教室の仲間達と激論をかわし、ダベリ、歌い、文字通り青春を謳歌していた時代でした。そして、第十回国民体育大会柔道競技に新潟県代表として参加した際に、同窓会から激励金まで頂き感激したことを懐かしく思い出していました。

今、大学のキャンパスにも当然質的变化をし、改革のための困難な諸問題を抱えての状況であり、高等教育のあり方を問い直す重大な時期を迎えていると思います。

その中において、地域社会の信頼に応え、豊かな教養と高い専門知識を持った人材を育成すること、世界に価値あ

る創造的研究を推進するとい
う、本学の教育実践が脈々と
受け継がれていくことと思ひ
ます。

同窓会の一員として、一人
一人の生徒を大切にすること
目標を縦糸とし、学部、先生
方の情熱を横糸として、すば
らしい教育実績、研究実践を
織りあげていかれますようご
期待申し上げます。地域社会
の高等教育の殿堂としての本
学の未来の創造を信じてやみ
ません。

高久 英昭（昭32農）

長野支部

長野県支部は、2004年
の支部会員が、136名を数える
までになった。本部から毎年
卒業生名簿をいたたき、新会
員を名簿に加えて現在に至つ
ている。



主たる活
動は年一
回の総会
と情報交
換であ
る。
今年の
総会は9
月11日に
近年恒例

となった長野市内のホテル三
景苑で開催された。僅か10名
余の参加であったが、総会後
の交換会では和やかな雰囲気
の中で語り合いができた。今
年は台風の上陸数が多く、長
野県内でも地滑りによる国道
19号の不通が現在も続いてお
り、その対応の指揮に奔走し
た先輩、乗用車の方向につい
て、低燃費・軽量化、ハイブ
リッド化などエコ・カーの時
代になるとの話題も注目を集
めた。各方面から近況が語ら
れ貴重な情報交換の一時を過
ごすことができた。最後に恒
例となった学生歌を合唱し、
次回の再会を誓い合いながら
散会した。

今回、新潟中越地震で被害
に遭われた地域の皆様にお見
舞いを申し上げますとともに
、一日も早い復興を祈念し
ております。

手塚 光明（昭46農）

富山支部

去る7月31日に新潟市内で
開催された常任幹事会に、嶋
倉支部長の代理として初めて
出席しました。

小林一三会長、鈴木敦士名
誉会長（農学部長）の出席の



もと、活
動報告、
会計報告
等の報告、
新年
度の活動
計画、事
業費予算
の提案が
され承認

されました。ついで支部活動
の報告があり、各支部とも総
会への出席者確保にご苦労さ
れている状況が報告され、続
いての懇談会で支部交流もあ
り、今後とも各支部との連携
を強化しなければとの意を強
く感じました。

今年の支部総会は、7月16
日に会員54名出席を得て、家
畜管理学の楠原征治教授を招
聘し開催しました。楠原教授
からは大学の近況等について
お話を頂きました。

支部活動はこれまでと同様
で、大学から恩師を招聘して
年1回の総会の開催、総会後
に報告を兼ねた「同窓会だよ
り」の発行（今回で22号）と
会員名簿の発行、そして年会
費（千円）の徴収です。今年
は会員54名出席を得ました
が、例年どおり若い会員と女
性会員の確保が課題となって
おります。

「同窓会だより」の内容は、
支部総会の出席者、活動報告、
会計報告、支部役員の他に、
特別寄稿として、昭和46年卒
の鈴木敏彦氏の「鳥類尾腺の
分泌及び調整機構に関する形
態学的研究」（学術博士号取
得）及び昭和47年卒の赤江静
雄氏の「富山県の畜産につい
て」を記載、さらに新潟大学
全学同窓会連絡協議会の組織
関係図でした。

最後になりますが、10月23
日発生の新潟中越地震により
死傷された方々及び家屋等に
被害を受けられました方々に
たいして心からお見舞い申し
上げるとともに、一日も早い
復興を祈念申し上げます。

小林 米和（昭39農）

福井支部

最初に昨年10月の新潟中越
震災で被災された同窓生の
方々、御家族の方々に心から
お見舞い申し上げます。

さて、昨年度「福井松涛会」
総会で永年会長を務められた
南忠員会長体制からその後任
として副会長富田憲治氏、事
務局長兼会計日下博幸氏、事
務局員牧野康哉氏及び私が選
ばれ本会を運営する事となり

ました。
前任南会長初め役員各位に
は心からの敬意と感謝を表し
ます。

微力ですが前任役員と同様
宜しくお願い致します。

さて、昨年11月5日福井市
内で県内在住同窓生56名中23
名（一部忙しくて遅刻）が出
席、恒例の「福井松涛会」の
総会が開催され、本総会では
昨年7月31日ウエルシティ新
潟での同窓会幹事会の報告等
を行い、多比良樹徳顧問の乾
杯を皮切りに、自己紹介と近
況報告や新潟での学生時代の
思い出話等をして会員相互の
親睦を深めました。

今回の



新大農学部福井松涛会総会

公務員から福井県職員になつ
た男性会員一名が加わり改め
て会員の絆を深める事を誓い
合つて盛会裏に楽しい一時を
過ごし閉会しました。

青木 源久（昭41農）

『水鳥飛び交う田園型 政令指定都市を目指して』



第10回新潟大学開学部フォーラム

水鳥飛び交う
田園型政令指定都市を
目指して



開催

① 平成16年11月28日(日)
 午後1時～5時(12時開場)
 新潟市長官舎文化会館
 (リネーとびあ)附属室

② 入場無料
 (学生、教職員、関係者)

内 容

1. 基調講演
 「新潟市の環境政策と政令指定都市」
 新潟 市長 斎藤 隆

2. 解説と質問
 「新潟市に環境政策をどう展開する」
 新潟市環境文化プロジェクト

3. コメント
 新潟 市長 斎藤 隆

4. パネルディスカッション
 「環境政策と市民参加」

5. パネル展示「平野の自然をみる」
 (新潟市環境文化会館にて)

参 加 費 (学生、教職員)

① 新潟市環境文化会館の申込書
 提出後、参加費が無料となります。
 申込書、申込書控え、申込用紙
 TEL 025-262-6461/FAX 025-262-4854
 E-mail info@ogr.niigata-u.ac.jp

入場無料
(学生、教職員、関係者)
定員 300名

主催/新潟大学開学部 共催/新潟市
 後援/新潟日報、新潟市環境文化会館、新潟市環境文化会館

でコメントをいただきました。つづいて『湿地創出のための課題』をテーマに行われたパネルディスカッションでは、擬似湿地創出のための市民と農家の連携、環境保全型農業の意義と問題点、冬期湛水に必要な水利権、環境教育のあり方などについて、活発な議論が行われました。

最後に伊藤忠雄副学長（社会連携担当）からフォーラム全体のまとめとともに、市民・農家・行政・大学によるバーチャルな研究組織立ち上げの必要性が強調され、閉幕となりました。

参加者は一般市民、農家、市民団体、高校生、国・県・市職員、本学教職員・学生・卒業生など多岐にわたり、260人でした。また、ロビーには、『平野の自然を探る』と題した16件のポスター展示が行われ、こちらにも注目を集めました。参加者に対して実施したアンケート調査の自由回答覧には、「これからの農家のあり方が考えられている実態」と提言だと感じた。解説もわ

かりやすかった。(60歳代農家)「擬似湿地としての水田について、多くの視点から専門的解説が開けて興味深かった。これからの課題も多いが、実現に向かってがんばってください(20歳台公務員)。「湿地創出という言葉に新鮮さを感じた。継続的な取組みを期待します。できれば協働したい。(50歳台自営)」「パネルディスカッションは大変興味深かった。こういう機会を継続的に開催してもらいたい(50歳代会社員)」「企画、提言内容などタイムリーで重要な問題。(50歳代団体職員)」などの意見が寄せられ、参加者からは十分満足していただいた傾向がうかがえました。

第10回農学部フォーラム実行委員長

紙谷 智彦 (昭50林)



平成16年度文部科学省科学研究費の補助を受けた学術講演会が、日本畜産学会と北信越畜産学会の主催により、新潟大学農学部が共催して9月23日新潟市の市民プラザで開催されました。この講演会は、家畜そのものの生産と改良の現状と将来の展望、動物性タンパク質の増産、美味しさおよび機能を追究するための最新の情報をわかりやすく説明するために企画されたもので、当日は、高校生と一般市民320名の参加のもと、農業生産科学科および応用生物化学科の畜産関係教員が、「新潟の畜産」(楠原征治)、「草からミルクと肉を作る」(岡島毅)、「卵はどうやって作られる?」(杉山稔恵)、「肉を美味しくするには」(西海理之)、「美味しい新潟産地鶏を作る」(藤村忍)、「肉牛改良の現状と展望」(祝前博明)、「生殖細胞を用いた動物生産技術」(新村末雄)という内容でそれぞれ講演を行いました。

■公開講演会 「暮らしに役立つ動物バイオサイエンス —身近な話題から将来を展望して—」を開催

新村 末雄(昭52院農)

新潟大学 テレビ公開講座 「新潟の食をつくる —伝統と未来—」

農学部及び自然科学研究科の教員により、テレビ公開講座を実施しました(8回シリーズ、BSN新潟放送、主任講師 応用生物化学科門脇教授)。内容と担当講師は次の通りです。

- 第1回 風土が育む新潟の食づくり (門脇教授)
- 第2回 コシヒカリ王国の危機と未来への挑戦(福山教授)
- 第3回 新潟の酒造業—その魅力と展望— (伊藤助手)
- 第4回 新潟産の米加工食品 (城助教授)
- 第5回 「にいがた地鶏」開発秘話 (藤村)
- 第6回 果物産地を支える収穫後技術(原助教、児島教授、元永助教)
- 第7回 知られざる新潟の水産加工品—かまぼこ— (西海助教)
- 第8回 食の先端技術とその

応用…技術開発の課題と産学官連携 (鈴木学部長)
この講座を通し、新潟の豊かな食文化や、多様な食品加工技術等をまとめ、県民に伝えることができました。実施にあたり、多くの卒業生の皆様、また新潟県及び市町村、食品関連企業等の方々からご協力を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。
藤村 忍(平2畜)

新潟大学地域連携 フードサイエンスセンター シリーズ講演会 「食のサイエンス テクノロジ」を開催

一昨年、農学部、工学部、教育人間科学部、歯学部約45名が所属する「新潟大学地域連携フードサイエンスセンター」が設立され(世話人…鈴木農学部長、山田歯学部長、谷口工学部教授、門脇農学部教授)、活動の一環でシリーズ講演会を開催しています。

第1回(3月) テーマ「食品のおいしさを探る…官能評価と生理的評価」/講演「舌の味・喉ごしの味」(歯学部真貝助教)、「食品の品質設計…官能評価の基礎と応用」(化学・感覚計量学研究所相島代表)

第2回(6月)「食品の安全性を考える」/講演「食品安全行政の新潮流…内閣府食品安全委員会について」(食品安全委員会本間教授)、「食品の安全性に影響を与えた事例」(元県生活衛生課長塚田氏)

第3回(11月)「健康は口から…かむことの定量化」/講演「食品のテクスチャーと咀嚼・嚥下運動」(静岡大学新井教授)、「咀嚼計測による食品の噛みやすさの数値化」(食品総合研究所神山室長)

食品関連企業や県内研究機関、行政関係者を対象とし、いずれも90名以上の参加を頂き、終了後の交流会にて活発な交流も行われ、充実した産学官交流の場となりました。

藤村 忍(平2畜)

第9回国際花卉球根 シンポジウム報告

本大会はアジアで初めて、平成一六年四月一九日から二日間で朱鷺メッセで開催されました。参加者は十七カ国、二一三名でした。口頭発表四九課題、ポスター九〇課題があり、本学の教員・大学院生、県研究機関の多くの方が発表し、高い評価を受け、充実した大会となりました。

前日の一八日に開催された公開講演会「育てて、知って、楽しむ球根植物」には一般市民を含む二百名以上の参加者があり、本学部の岡崎桂一氏「球根植物の魅力と品種改良の楽しみ」等の興味ある講演もあり、有意義な公開講演会となりました。

本国際会議が新潟県で開催されたのは、新潟が日本では花卉球根の研究・産業活動の中心地であると思われ、この大会が日本や新潟県の花球根の研究・産業の一層の発展につながることを望んで止みません。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、新潟大学、新潟県、新潟市には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

(文責 新美 芳二)

近藤亨講演会

開催される

後期授業が始まったばかりの十月四日に、農学部同窓会ならびに農学部後援会共催による近藤亨講演会が農学部の大講義室において開催されました。

近藤先生は新潟農林専門学校出身で、農学部の助教授を経て新潟県の園芸試験場で果樹の専門家として活躍された方です。55才の時ジャイカの果樹栽培専門家としてネパールに派遣され、ジャイカ定年の70才までネパールの農業振興に尽力されました。その後どうしても豊かなにしたいという気持ちを抑えがたいとして、私費でネパールに残り、83才の今日までネパールでも最も標高が高く自然条件の厳しいムスタンで農業開発に奮闘の日々を送っております。

当日、MDSA(ネパール、ムスタン地域開発協力会)事務局の原さんと同道された近藤先生は、教員や学生それに口コミで講演会のことを知った卒業生合計約80名を前にして、日本の農業、そして農学部はもっと元氣を出しなさいと、とても83才とは思えぬ大きい声で我々に対する叱咤激

励から話を始められました。

ムスタンはヒマラヤ山脈を挟んでネパールの大半の国土とは反対側にあり、標高二千八百mから四千mの高地で、プロジェクトで紹介された写真を見る限り岩だらけの所です。そこに近藤先生が開いた農園だけが緑の一角を見せていました。その農園で花を咲かせたり、立派なリンゴやブドウを実らせたり、山羊やこれだけ標高の高い所(3000m)では無理といわれた乳牛を飼ったり、ニジマスを養殖したりした事例を次々に写真で紹介され、ただただ驚くばかりでした。またアツバムスタンと言われる4000m近い所の農業開発にも取り組んでおられる様子も印象的でした。講演終了後は多くの質問があり、予定時間をはるかに超えた熱気あふれる講演会でした。

近藤先生は現在、MDSAというネパール支援の国際NGOボランティア団体の支援のもと、ムスタンで学校を作ったり、医療施設を作るなどの活動にも力を入れておられます。

OBの中で支援に加わりたい希望の方がおられたら、インターネットでMDSAを検索していただくとホームページがでますので、参照していただきたいと思います。

三沢 眞一(昭44農工)

農学部

国際交流だより

楠原 征治

(農学部国際交流委員長)

これまで農学部は、インドネシアのポゴール農科大学、中国の東北農業大学、モンゴルの国立農業大学、韓国の嶺南大学校自然資源大学の4大学と交流協定を締結しておりますが、今年度新たにタイ

国のチェンマイ大学との間で、学術交流協定を締結いたしました。チェンマイ大学の農学部研究員であつたラムランスリー・ソラヤさんが1994年から新潟大学大学院自然科学研究科後期課程に入学し、当時の五十嵐太郎教授と

大山助教教授の指導のもとでスイセンの栄養生理に関する研究を行い、博士の学位を取得されております。タイへ帰国後もチェンマイ大学農学部講師として大山教授と共同研究を続けてこられました。

交流協定を締結した5大学のうち、中国東北農業大学、モンゴル国立農業大学および韓国嶺南大学校自然資源大学

とは学生交流に関する協定も結んでおります。この学生交流協定によつて、昨年度から中国東北農業大学から1名の学生が新潟大学農学部在籍し、履修した単位を東北農業大学の単位とする単位交換を行なっております。今年度も東北農業大学の1名の学生が1年間単位交換の協定に基づいて、交換留学生として在学しております。

新潟大学農学部からフィールド科学教育センターを中心とする5名の教職員と農業生産科学科地域総合農学コースの学生10名が5月上旬に中国東北農業大学を1週間訪問し、中国北東部の農業を視察するとともに、東北農業大学の学生との間で交流を深めました。

11月13日には同窓会のご援助による恒例の農学部留学生と指導教員との懇親会が開催されました。農学部の教員が指導する留学生は11月1日現在、19名(中国10、インドネシア1、バングラデシュ2、イラン1、エジプト1、ネパール2、台湾1、ガーナ1)です。懇親会には留学生18名と

その家族9名、ならびに関係教職員22名が参加しました。来賓として、多くの留学生がお世話になっている新潟大学国際センター長の阿波村教授、自然科学系長の田村教授、大学院自然科学研究科長の長谷川教授をお招きし、ご挨拶をいただきました。歓談の間には中越地震が起こつてそれほど日が経っていないこともあり、留学生の地震に対する感想なども聞かれました。また、日本語によるユーモア交際の留学生の自己紹介や家族紹介があり、中国留学生の歌も披露され、一段と会が盛り上がりしました。異国での慣れない生活や研究など頑張つて欲しいものと思います。



新任挨拶

フィールド科学教育研究センター

三浦 慎悟 (教授)



昨春、FCに赴任しました。無謀にも、赴任と佐渡初

体験を重ねたので、とびきりの僻地であることに驚きました。新潟大学以前は、兵庫医科大学、森林総合研究所にいました。久しぶりの大学は、PCプロジェクトによる授業、質問票の提出、目白押しの会議など、ずいぶんと様変わりし、これにも驚きました。学生の雰囲気も変わり、戸惑うことしばしば。いつの時代も教育されるのは教育者なのかもしれません。

専門は、野生動物の行動生態学と保全・管理で、シカ、カモシカ、ツキノワグマなどの大型哺乳類を研究対象にしてきました。FCにはトキの野生復帰を実現したい熱い思いでしたが、課題は山積しています。佐渡をモデルに里山や平野に豊かな生態系を取り戻していく、その延長線

上に、野生動物との共生や、持続可能な社会の姿が垣間見られるのではないのでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

フィールド科学教育研究センター

高橋 能彦 (助教授)



平成16年2月に着任しました。高橋よしひこと申します。前職場は長岡市にある新潟県農業総合研究所です。大学では圃場実習やフィールドを中心とした教育・研究に従事させて頂きました。新通ステーションに常勤しています。

出身は加茂市の山間部で、村松ステーションには自動車20分程度の距離です。今は家内と2人で学部裏のお馬さん達の更に奥にある宿舎にひっそりと暮らしています。前の職場はおじさんおばさん達の集合体で、毎年その年齢が平行移動していく感じでした。着任当初、キャンパス内を歩くと右も左も若者でとまどいましたが、最近、その

霧囲気にも慣れてきたようです。卒論コースの3年女子3人組(写真)を「トイレの200ワット」と命名しました。無用の明るさというか…笑。お酒を飲み過ぎて、いつも家内に叱られています。来る酒は拒まず、去る酒は追う…かな？

大学院自然科学研究科

細尾 佳宏 (助手)



平成16年4月1日に着任しました。生まれも育ちも

名古屋で、名古屋大学農学部を卒業し、名古屋大学大学院生命農学研究科で博士(農学)の学位を取得しました。その後すぐに本学に着任しましたので、今回が生まれて初めての日本海側での生活、さらに一人暮らしです。着任して約半年になりますが、ようやく少しずつ慣れてきた感じがします。しかし、これから初めて日本海側の冬を経験することになるので、いささか不安です。

学生時代の研究テーマは木材の組織に関するもので、木材細胞壁の形成過程を電子顕微鏡で観察していました。本学に着任してからは、雄性不稔と呼ばれる花粉を全く作らず飛ばさないという性質を持ったスギに関する研究が主な研究課題です。無花粉スギは富山県や新潟県内などで計10本以上発見されていますが、これらのスギで雄性不稔が発現する仕組みを組織学、生化学そして分子生物学的な手法を用いて解明するための研究を行っています。無花粉スギを使ってスギ花粉症の人々を救うことがこの研究の最終目標です。よって、学生時代の専門はいわば林産学でしたが、現在は林学の方にも少し足を踏み入れているといった感じです。

研究はともかく、教育活動に携わるのは今回が初めてなので、まだまだ良く分からないところがありますが、これから色々なことを経験しながら日々努力して参りたいと考えています。そして、楽しく有意義な研究、教育生活を送りたいと思いますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

新潟食糧会

「新潟食糧会」は、新大同志生で新潟の食品に関心のある方の情報交換、交流を目的とした親睦会です。15年前に「弥生会」として発足しました。今年異業種交流の場をより広げ、産官学交流等しながら「新潟の食」を豊にする事をめざして、名前を変更しました。再出発会は、産学交流をテーマに鈴木農学部部長もご出席いただき9月に大学で行いました。年数回の会合を持ちながら、会員同志、自己啓蒙の場として盛り立てたいと予定しています。現在39名が参加しています。「食の関係者」ですので農学部卒業生が多いのですが、理、工、教、人文等の卒業生も参加しています。

趣旨にご賛同いただける方のご参加をお待ちしています。

連絡先：新潟食糧会事務局

斎藤 秀一

mail: skplanjp@yahoo.co.jp

賞 新潟日報文化賞

農業生産科学科の楠原征治先生が、産業技術部門で平成16年度の新潟日報文化賞を受賞されました。先生は、長年にわたってブタの骨軟骨症に関する研究に取り組み、その発症機構を解明するとともに、診断技術の確立にも尽力されてきました。このような基礎研究の結果をもとに、新潟県農業総合研究所畜産研究センターと共同して、ランドレース種系統豚「ニホンカイL2」を作出されました。この銘柄豚は、骨軟骨症の発症個体を選抜除外したことで、肢蹄が強くなり、産肉と繁殖の能力も高まったことから、国内でもトップクラスの能力と質を備えたものであるという評価を受けております。以上のようなブタ骨軟骨症の発症機構と診断技術の確立ならびに優良系統豚の開発という長年の功績に対して本年の新潟日報文化賞が授与されました。

新村 末雄(昭52院農)



賞 学会賞等受賞 2004年度 日本家禽学会奨励賞

農業生産科学科の杉山稔恵先生の「産卵鶏骨髄骨における骨吸収と骨形成に関する研究」に対して2004年度の日本家禽学会奨励賞が授与されました。受賞の対象となりました研究は、産卵鶏のカルシウム代謝における骨髄骨の役割を、生理学、組織学、内分泌学および分子生物学的な観点から追究したもので、高度な卵生産能力発現の機構解析に端緒を開いたものとして国の内外から高く評価されているものであります。9月26、27日の両日にわたって広島大学で開催された日本家禽学会創立50周年記念・2004年度秋期大会で、受賞式と受賞講演が行われました。

新村 末雄(昭52院農)

賞 2004年度 日本家禽学会秋季大会 優秀発表賞

「鶏肉の味分析型パネルの選定手法の検討」で受賞。川端和美・佐藤美保・立石智宣・藤村 忍ノ(独)家畜改良センタ―と当方の共同研究

藤村 忍(平2畜)

賞 日本缶詰協会 受技術賞

応用生物化学科城斗志夫先生と大学院自然科学研究科渡辺敦夫先生、原田三郎氏、鈴木涼子氏、谷猪由紀氏、中村学園大学太田英明先生が共同で行われた「セラミックMF膜によるパーシャル分解ペクチンを含有した清澄リンゴジュースの開発」に対して平成16年度日本缶詰協会技術賞が授与されました。

リンゴに多量に含まれるペクチンは、整腸作用など食物繊維としての生理機能を持つものの、果汁に濁りやオリを生じるため、これまで清澄リンゴジュースを製造する際には除去されねばなりませんでしたが、しかし受賞研究では、リンゴ果汁中のペクチンをペクチナーゼで部分分解した後、耐久性や洗浄性、除菌能に優れたセラミック精密ろ過(MF)膜でろ過することにより、ペクチンを含んでいながら清澄で無菌化されたリンゴジュースの製造に成功しています。今後、本法を用いた飲料が市場に登場することを期待したいものです。

佐藤 努(平12自然研)

農学部 農学部の動向

平成15年11月以降の農学部の動向は次の通りです。

退職

長年、当農学部発展のために、また同窓会のために多大なご貢献をなされた方々が平成17年3月に退職されます。

・生産環境科学科

教授 早川嘉一 先生

・フィールド科教育研究センター 耕地生産部

助手 集治善博 先生

・農業生産科学科

教室系職員

渡辺恵子さん

(平16年9月退職)

長年にわたり積み重ねてこられたご功績に執心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

会員 通信

佐藤孝さん(平7応生)が、日本農学会の第3回農学進歩賞を受賞されました。

小柳渉さん(平1農化)が、北信越畜産学会奨励賞を受賞されました。

次の会員の方々が学位を取

得されました。

白川 隆(昭58農)

博士(農学)(新潟大学)

高野裕子(平11農生)

博士(学術)(新潟大学)

高野瀬洋一郎(平8生環)

博士(学術)(新潟大学)

阿部みどり(平11生環)

博士(農学)(新潟大学)

森口 善成(平11生環)

博士(農学)(新潟大学)

お祝い申し上げます。

教員 訃報

豊島重造 名誉教授が平成16年12月9日に逝去されました。

玉利勤治郎 元農産製造学教室教授が平成17年2月14日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員 訃報

次の会員の訃報が事務局に届けられています。

安中昭雄(昭28農)

住吉 功(昭38林)

大野幹夫(昭48畜)

徳崇富士夫(昭61畜)

謹んでご冥福をお祈りいたします。

国立大学法人新潟大学の 発足と運営について

理事 社会連携・財務担当・副学長

伊藤 忠雄

平成一六年四月より、新潟大学は「国立大学法人法」にもとづき法人化されました。

法人化は、①「民間的発想」によるマネジメント手法の導入、②「学外者の参画」による運営システムの制度化、③国家公務員法体系にとらわれない弾力的な人事システムの導入、④評価の実施による事後チェック方式の採用、といった点が狙いとされており

ます。いずれも私どもがかつて経験したことのない制度の転換であります。法人化は、大学に経営に関する権限と責任を大きく与えるとともに、自律的な運営を求めているのです。さらに、授業料等学生納付金を一定の幅で自由化すること、大競争時代の到来を告げているのです。護送船団方式の時代は確実に終焉しました。

法人化されて間もなく一年を迎えようとしています。未体験ゾーンの暮らしには、様々な戸惑いもあります。

予算の作成、概算要求など経営に関する重要事項は学外者の参画による「経営協議会」の承認を得なければなりません。従前の「評議会」は学術面の重要事項を審議する機関に機能縮小しています。この二つの審議結果を踏まえつつ重要事項については学長と理事による「役員会」が機動的・戦略的な意思決定を行うことになっております。

財務会計制度も大きく変わりました。これまで特別会計によつて措置されていた国立大学の予算は、収支差（いわゆる赤字）を運営費交付金で補填されているものの、中期目標の達成度合いや教育研究成果による第三者評価によつて配分を受けることになっていきます。本年度の新潟大学の場合、歳出額四五億円に対する独自収入は約五〇%にすぎません。外部資金の獲得が極めて重要になっていくと

もに、重点的・戦略的な資源配分が必要になっていきます。

他方、法人化されたとはいえ、新潟大学が国立大学であることに変わりはありません。とりわけ、学部・大学院は学生の教育を担う組織としてその重要性は不変であり、新たな教育改革も進められています。就職支援活動も強化され、今後さらに「キャリアセンター」を設置する予定です。教員組織も「教育研究院」という学内組織が機能を始めており、新潟大学のひとつの特徴として今後の成果が期待されています。

さらに、地域社会との連携活動も一段と重要となっており、東京事務所、駅南キャンパス等を戦略的に活用していくことにしています。

私たちは環日本海地域における「知」の拠点を担う新潟大学の新たな使命と役割をしっかりと自覚しつつ、地域と世界の発展に貢献する大学を目指して参りますので、同窓生各位の一層のご支援をお願いいたします。

新潟大学全学同窓会 連絡協議会について

I 新潟大学全学同窓会連絡協議会の発足について

平成15年12月に、人・法・経済学部同窓会を中心に、新潟大学全学同窓会設立の話が始まり、「新潟大学」も加わり、各学部同窓会会長が平成16年1月から3月にかけて、全学同窓会設立準備会を設立し、目的、会則、事業、会員等について各学部同窓会会長の合意の基に、全学同窓会連絡協議会を立ち上げるための準備会（後日、全学同窓会連絡協議会運営委員会）を各学部同窓会役員（副会長、総務役員、幹事長等）で組織した。

平成16年4月1日に全学同窓会連絡協議会が発足した。

新潟大学ホームページ（<http://www.niigata-u.ac.jp>）の同窓会欄にあるように、目的として「新潟大学の発展に寄与するため、各学部同窓会相互の交流と連絡・親睦を通して、全学同窓会を設立することを目的とする」とされている。従つて、各学部同窓会の強固な基盤を固めることと、組織化されていない同窓会の設立を図ること。また、

全学同窓会連絡協議会と「新潟大学」との連携により全学同窓会の設立を目指すための活動である。

平成16年度の活動は、①新潟大学や全学同窓会のPRパ

ンフレットの作成、②全学同窓会のホームページの構築、③全学同窓会の交流会の実施、④新潟大学への支援、⑤「新潟大学」と全学同窓会との懇談会の開催がおもな事業である。

そこで、平成16年4月の全学同窓会連絡協議会の発足祝賀会、新潟大学と第1回懇談会を開催、全学同窓会連絡協議会のPR誌第1号の発刊、PR誌名の募集、さらに、9月の大学祭に合わせて、新潟大学と各学部同窓会、新潟大学と全学同窓会連絡協議会及び外部団体、企業との懇親会の企画をしたが、交流会・懇親会は新潟県中越地震のため延期された。

II 農学部同窓会の全学同窓会連絡協議会への対応

全学同窓会連絡協議会への参加は、平成16年7月31日の常任幹事会での審議で会費及び負担金について了承され、全学同窓会連絡協議会役員には、理事に小林会長、同会運営委員に山本幹事長が加わりました。また、同会会員は各学部同窓会会員ですが、会員数のみで、会員個々の資料は引き継ぎません。農学部同窓会会員は全学同窓会会員として毎年別登録となります。また、全学同窓会連絡協議会のPR誌等の送付については、農学部同窓会に委任されていますので、年1回の「松濤」発行の際に送付することになります。

7・13水害

2004年7月13日、新潟県中越地方は大水害に見舞われ、この被害調査に多くの先生方が参加されました。これを受けて学務委員会では8月4日に緊急報告集会を開催し、さらに夏休みには学生ボランティアを組織して、小国町（8月13日）、中之島町（8月23日）、見附市（9月19～20日）で水田での泥に埋まった側溝の泥上げなどの作業を行いました。



長岡市桂町（八丁沖）の冠水圃場（一週間後）



見附市月見台の冠水圃場



35cmの土砂堆積



堆積土砂による果樹の根の呼吸阻害

編集後記

7月13日の新潟豪雨の後、台風15号をはじめとする度重なる台風、そして、10月23日の新潟県中越地震と新潟県はかつてない災害に見舞われ、多くの人が、その着実な復興に向けて、一歩ずつ努力を積み重ねています。今回の同窓生からのたよりは「食と環境の現場からのメッセージ」ということで諸先輩の皆様



に原稿をお寄せ頂いております。新潟豪雨の際に農学部らしい活動ということとでその一こまを最終頁にご紹介させて頂いております。2004年は、自然災害の恐ろしさとして、地域のコミュニティ、人々のネットワークの大切さを認識させてくれた年でした。同窓生の中にも多くの被災された方々、知人や親戚の方々が被害を受けられた方も多いと思います。人は支え合うもの、経験を活かすものです。今回の地震の復興は、かなりの期間を要するものと考えられます。必要なことは、多くの人が関心を持ち続け、応援を続けることです。2005年が皆様にとって幸多いことを祈念いたしますとともに、継続した応援をお願いします。（H・W）

【編集委員】

委員長 渡辺広治（農27）
委員 青木 厚（林30）
" 箕口秀夫（林30）
" 田沢 晃（農工34）
" 熊木 衛（農39）
事務局 小林圭次（農3）